

り伝えなければならぬ。そのことが亡き戦友に捧げる最大の今できる私の仕事である。歴史は繰り返すと申しますが、戦争は二度と起こしてはならない。

日本の地に二度と帰ることのできなかった戦友、この大戦で亡くなられた方々の霊安らかなることをお祈りし、また帰還された方々の御健康を祈願して、抑留記といたします。

### 【執筆者の紹介】

現役軍人としては関東軍の一員として活動し、昭和二十年、旧奉天市で終戦を迎えられています。

平成六年、北海道シベリア慰霊碑建設、及び以後の慰霊祭に毎年出席協力されましたし、平成十一年七月、小樽市で初めてシベリア抑留関係展示会開催に当たり、シベリア抑留関係実行委員として活躍されました。

(北海道 安田 忠雄)

## 知られざるシベリアを語る

北海道 澤田 清吉

昭和二十年、日本は長い間続いた戦争に敗れた。南洋の諸島にいた多くの日本将兵たちは武装解除のあとほどなく、日本に帰還してきた。ポツダム宣言の趣旨の通りである。

しかし、旧満州、北朝鮮、樺太、千島にいた将兵並びに民間人の六十万人余りは、ソ連に強制抑留され、飢餓と酷寒のシベリアに、軍事奴隷として酷使されたのである。

私は、昭和十九年四月、宗谷要塞重砲兵連隊に臨時召集を受け、入隊三カ月後に、樺太西能登路岬に駐屯する第二中隊に配属され、北海道と樺太を結ぶ稚泊連絡船の航路の安全確保と援護、宗谷海峡から日本海に侵入せんとする、特に敵潜水艦の阻止、捕捉撃滅を目的として、昼夜を問わず任務に就いていたのである。

昭和二十年八月九日、突然ソ連軍が中立条約を破棄して、北緯五十度の国境線を突破して南下、侵攻を開始してきた。

八月十五日、天皇陛下の終戦詔書の放送があった。

二十四日、ソ連軍が真岡に上陸、熊笹峠の戦闘。二十三日、樺太師団とソ連軍との停戦協定の成立。師団長以下は豊原博物館に收容され拘束の立場におかれる。

八月三十日に至り、ようやくソ連海軍艦艇が白旗を掲げて上陸、武装解除を受ける。九月二日、中隊全員、徒歩で亜庭湾岸を北上する。一週間歩き続けて、集結地大泊女学校に到着。

十月二十日深夜、貨物船に乗船して大泊湾出帆。北海道宗谷岬を眼前にしなが、船は間宮海峡を北上して、食事の給与全くなくして三日目、恵須取の対岸、沿海州ポートワニ港に上陸。直ちに貨車に乗せられて奥地に進み、ホトー三〇三收容所に入る。ありついた食事はタバコ大のフスマ入りの黒パンと野菜スープ、といったも、箸に実のひっかからないスープであった。

#### 南京虫撲滅戦争

消灯、ようやく寝静まったと思うと、南京虫がどこからともなく這い出して来て、たちまち所嫌わず身体中を刺され、誰もががさがさ起き上がって、南京虫退治に騒ぎ出す。バラックは丸太を横に積み重ねた構造のため、その割れ目から南京虫がゾロゾロ這い出して来る。潰しても潰しても出てきて身体を刺す。潰すと独特の悪臭を放ち鼻をつく。

我々にとって生まれて初めての南京虫との遭遇である。この南京虫に悩まされて不眠状態に陥る。寝不足のうちに起床の鐘が鳴る。鐘といってもベルではない。つるした古レールを叩いての起床合図である。バラック内の内壁は真っ赤に南京虫で塗りつぶされる。もたもたしていると、ソ連監視人が早く行動しろと大声でどなり込んでくる。

翌日、ヤポンスキー（日本人）の健康診断がある。強制労働に振り分ける等級を決めるためである。神経痛、リウマチ、腰痛など、外面にあらわれない症状のものは休ませてくれない。熱があるとか、外傷がある

といったものは休ませてくれる。

バラックの中には「働かざる者は食うべからず」の標語が掲示されている。健康診断で病弱者と認定された者たちは、南京虫を潰した後始末や、真つ赤に汚れた壁を、石灰を水に溶かして白く塗り替える作業をさせらる。

#### 翌日から早くも労働に従事

ふらふらしたまま朝食、それが黒パンとスープで終わり。昼食は黒パンと塩蔵ニシンの三分の一匹分（塩鱒の場合もニシンぐらいの大きさ）を持って原始林の中に入って行く。シベリア唐松、黒松、赤松など巨木の密林の中へ、監視兵の先導で入って行く。

ロスキーの鋸は二人挽き。長さ一メートル、両側から取手を握って、押し返すようにする押し挽きである。日本のように一人挽きの、手前に挽くのではない。切っているうちに松ヤニが鋸の歯にくっついてだんだん切れなくなるから、力が要るようになる。倒した木を一メートルずつにタマ切りする。さらにこれを縦割りして薪に仕立てて、一メートルの高さに積み重

ねる。こうしないと、監督は数量を確認できない。立米（立方メートル）計算が終わると、さらにこの薪を肩に担いでトラックの入ってくるころまで担ぎ出すのである。

冬は雪で足が滑る。倒木につまずく。よろよろと、まるで亡者のようになって、ようやくバラックに戻るのである。

二度目の正月を迎えた。零下四十五度、言語に絶する寒さである。元日だけは休業であった。炊事班長はこの日を迎えるため、一同を喜ばせるため、ひそかにコーリヤンを精白したり、小豆とか砂糖を少しずつ貯めておいて「おはぎ」をつくり、正月のご馳走とした。ささやかではあるが、こうして故国の正月を偲んだのであった。

平日はどうかというと、寝ても覚めてもただ食べ物の幻影がちらつくばかりである。飢餓地獄のバラックの片隅に集まっては、切々たる望郷の思いをこめて「異国の丘」を歌って、わずかに慰め合うのであった。ああ何としても帰りたい、みな元気で何とかして帰る

ぞと、暗いケロシンランプの明かりに祈る日々であった。

### 飢と寒さと重労働

シベリアの夏は遅い。凍土が深い。アカザ、イラクサ、タンポポ、アザミ、カエル、ヘビ、松毛虫のさなぎなど、煮たり、焼いたりして食べる。あるときは屋敷のスープの具にして少しでも増量して、腹もちをよくして食べるのである。何とかして生き耐えて故国の土を踏みたいばかりにであった。

毒茸事件というのがあった。森の中では、森の恵みとして茸が生える。いくらでもとれる。それを飯盒で炊くのである。食べたい一念の食欲が先に立って、有毒、無毒の見境もなく食べて、ついに茸中毒で数十人の人があたり、何人かの人が惜しくも命を落としたことは、悲しい出来事であった。

### 労働地獄の裏側で

ラーゲルでは飲料水、浴場用水はすべて給水車で運んでくるから、水は大変貴重である。しかもシベリアに渡ってから、一切生水を飲むことが禁じられてい

る。硬水であるばかりか、水による伝染病の発生に非常に神経を使っている。特にこのバム鉄道沿線では赤痢が多発していたから、なおさらである。

浴場では、小さなサラダボール三杯の湯が割り当てである。二杯で身体を洗い、残りの一杯は流し湯である。どうするかというと、まず湯を口に含んで、口から少しづつ吐き出しながら手の平に受けてまず顔を洗う。同じやり方で両腕、両脚、胸、腹と、含み湯をかけたながら洗っていくのである。少ない湯量で顔を洗い、手足を洗うという、ロスキーのやり方の合理性には驚きであった。

ロスキーの虱に対する警戒心はまた非常に強い。とはいうものの、毎日が着たきり雀で、寝るも起きるも着たきりでは、出すなといっても虱が発生して当たり前である。入浴の際に脱いだ衣類はすべて、リングという金輪に通し、消毒室に入れる。床は鉄板でできていて、床下は火炉である。下で薪を焚いて消毒室の温度を上げる。この熱気で虱をあぶり出し、殺そうというのである。これがロスキー方式の虱退治である。

入浴が終わり消毒室で暖められた衣類をまとうと、まことに気持ちが良い。ぼうつとして、生き返った心持ちになるから不思議である。ある収容所では、この虱で発疹チブスが発生し、投棄する薬もなく、みすみす多くの死亡者を出したと聞いている。

ヤポンスキーにとって驚きであったことは、この入浴の機会に、ソ連ではどうも男女にかかわりなく、身体の大事などころの体毛を西洋剃刀で綺麗に剃り落としてしまうことである。年に一回ぐらいだったと記憶するが、裸になって一列に並び、理髪経験のある者が集められて、体毛剃りをやらされるのである。そばにはソ連の女医、セストラといって看護婦程度の女性、じいっと監視の目を光らせているので、ごまかしはできない。要は発疹チブスの予防のためだという。そのくせ、あごヒゲ、鼻ヒゲを伸ばしたり頭髪を伸ばすことは許されるのである。ヤポンスキーはどうしても若く見られやすいので、ロスキーに馬鹿にされないためにも、ヒゲを伸ばした方がよい場合が多い。

シベリア生活、二度目の春を迎えた

妻も子も 腹充ちたるか 二度の春

われシベリアに 祈り悲しも

と歌った人がいた。

お正月を楽しんでいるうちに鉄道補修隊に編成替えとなり、マンガクト（モンゴフトとも言う）第二〇八収容所に移る。

このバム鉄道は、日本の敗戦直前、昭和二十年七月に敷設されたばかりのもので、ソ連の政治犯を中心とした囚人の手で敷設された。粗雑な工事で、二本のレールを敷いたばかりのものである。まだ路盤が固まっていないから、その路床を補修強化する仕事である。

線路の両側の路盤固めだが、凍土のため四、五月ごろまで土方工事はできず、枕木交換、線路の路床揚げ作業であった。一にも二にも飢餓と酷寒。食物は少ない補給、寒さは着たきりのシュエーバ（綿羊の毛皮外套。毛のある表皮を内側にして空気層をつくって保温性を高め、脂質分の強い裏皮を外側に向けることにより氷雪をはじく）だけでは間に合わない厳しい寒さで

ある。

ロスキーの監視兵はどうかというと、このシューバの上にはもう一枚の、しかも地べたをひきずるような長いシューバを重ねて着込んでゐる。足許からくる寒さを防ぐためである。

こちらは、ただでさえ少ないカロリーの食糧で、ほとんど体温が奪われてゆく。寒さの中で働かされるのだから、悲劇的であつた。

苦笑、長い年月の間に

朝食時に、各班から四人出るとの達しがあつて、自分も出ることにして十六人、行き先は無人駅で、機関車の燃料である薪積みであつた。

時間になると、三台、四台と、徐々に貨車が入つてきて、薪の積み込みである。ロスキーマダムが五、六人、車の上に乗つていて、薪を下から差し上げると、上でマダムが引き取るのである。

小休止のときヤボンスキーが、印鑑に使う朱肉を見せて、口紅のように唇に塗つてみせた。さあ大変、マダムたちは「それをくれ、くれ」と言つて離れない。

そこで「ボロシヨイ・フレーバ・ダワイ（大きなペンとなら交換するぞ）」と言つたら、本当に我々が薪を積んでゐる間にボロシヨイ・フレーバを抱えて持つてきた。お蔭さまでいくらか腹の足しとなり、一同大いに満足感を味わい、また大笑いしたことが忘れられない。

いよいよシベリアにも春がやつてきた。厚い凍土も解け始める。鉄道線路は一段と高いところを走つてゐる。その両側の路盤の土盛りをするのが我々の仕事である。傾斜がきついで、霜、雪の日には足許が悪く、滑つてしまい、なかなかノルマが上らない。そこでターチカ（一輪車）の前に縄をつけて引っ張り上げる者、下から押し上げる者が協力し合つて仕事を進める。何しろロスキーのターチカは馬鹿でかく、転んで壊してしまい、ノルマ完了はいよいよ遅れる。監視兵は「ヴィストラ・ダワイ」と叫び、ラーゲルへの帰りが遅くなると銃を振り回してせき立てるのである。真つ暗になつてからの晩飯だ。一年たつても食事の内容は一向に改善されない。コーリヤンのカーシャ

(うす粥)に、綿羊や山羊の蹄のスープである。カーシャの中のコーリヤンの粒を煮えたら十八粒しかなかった。

#### 異国での楽日の一コマ

夏になり、線路のカーブ修正作業で、十五人ぐらいで鉄棒を持って曲がり角を是正。歩いているうちに列車が来て、あわてて全員が避難する。よく見ると、列車はロスキーマの重刑囚を乗せた貨車が十五両ぐらい続いている。一両ごとに監視兵が銃を片手に持って乗っていて、物々しい警戒ぶりである。列車はスリップして停止してしまつた。

機関助手が二人降りてきて、線路の両側に置いてある砂袋から、レールに砂を撒いていく。列車が長いのでスタートできず、今度は一旦バックしての発車だ。物凄い馬力だ。機関車の煙突から出る火の粉が飛んで、線路わきのツンドラや森林に火がついて大火災になることもある。我々が消しに出かけることにもならず、昼夜燃え続けていたことがあつた。

#### ウポールナヤ(便所)

收容所のトイレは衛生的立場から、バラックから五十メートル以上も離れたところに造られている。一段高くまわりは囲つてあるが、トイレの中はまったく仕切りというものがない。一尺五寸幅の長い板に、丸い穴が並んであけてある。これにはヤポンスキーは全く困惑する。鳩の巣のような一つ穴を使って大小便を処理しようとするから大困難である。

ロスキーマがたまにこのトイレに入ってきて用を足すことがある。ヤポンスキーの横に並んで、ズボンをおろしてしゃがんだかと思うと、三十秒もしないで用を足して出ていってしまう。これには、どうなっているのかと驚いたことがある。ヤポンスキーはこうはいかない。この一つ穴を使って、大は、小は小と上手に区別して用を足さねばならない。そうでないと、たちまちトイレは修羅場となつて大変なことになる。

酷寒零下三、四十度のウポールナヤを、月に二、三回、各班から三、四人の使役が出て作業する。道具は鉄棒とスコップである。大便が鳩の巣穴から、まるでノッポビルのように突き出ている。そこで鉄棒が主

役。まずノッポビルを途中から崩していくのである。そのうちに、その破片がシューバの毛の中に入り込み、それを知らずにバラックに帰ると、それが溶け出してきて大変なことになる。自分自身で工夫しながら四年あまりを、とうとうトレットペーパーなしで生き抜いてきたのである。

### 重労働地獄での体位検査

やせ衰えた尻の皮をつまんで一級、二級と判別するのが体位検査である。私もとうとう三級・虚弱者にされてしまった。一カ月休養班に入れられる。といっても働かざる者は食うべからずで、休養といっても、朝一時間おそく自分たちの糧秣受領の使役である。十五人ぐらいで、一・五キロの道のりを出かける。

ロスキーの倉庫主任を先頭にして、畑を斜めに突っ切って、穀物、肉類、塩蔵した魚、油、岩塩などを、少しずつ麻袋に入れて帰ってくるのだ。帰り道、マホルカ煙草の畑を通るので、畑に残った煙草の切り株を足で蹴飛ばして、できるだけ沢山掘り出して拾い集め、愛煙者の仲間分配到する。

午後からの休養時間を利用して、マホルカ煙草の固い根株を削るのに大忙しである。かの有名な「日本新聞」を切り裂き、それに刻んだマホルカを包み込んで、ツバをつけて巻煙草の形にする。火を借りて吸うのである。仲間たちから非常に喜ばれた。そのときの仲間たちの笑顔が印象的で、今も忘れられない。

さて、ソ連に入国して、その日から是非必要なものは何であったか。それは食べ物である。二年目の半ばで虚弱者となった私は、休養三カ月あまりで、同僚たちの励ましもあって、赤松の葉（シベリア赤松）をとってきてもらい、これを煎じて飲み続けたり、雑草の芽をスープに入れて食べたりして、ようやく体位検査で二級になり、今度は炊事労働に編成替えになった。

ソ連支給の主食は、米、コーリヤン、大豆など様々であるが、米は玄米、コーリヤンは皮つき、釜に入れて煮るのだ。水を沢山入れて雑炊仕上げ（カーシャ、粥）にして、途中で植物性油を入れて弱火で煮るのだ。

が、油断すると焦げつかせる。腹に入っても腹もちが悪いから、労働する者にとって頼りにならない。スープは、綿羊、山羊の蹄、または鱈、鮭、鯿などの塩蔵もののスープ。具は目の保養ぐらいしかなく、当たらない人の方が多い。

蹄の上皮はストープの上であぶって、中の軟骨をコリコリと食べるのだが、何とも言いようのない食べ物であった。戦争中の食料難のときでさえ、玄米は一升瓶の中に入れて棒でつついて白米にしたり、臼でひいて食べた記憶がある。その反面、このごろはどうしたものか、玄米は滋養になるとか、脚気によいとかで、わざわざ玄米を買ってきて食べることが流行っているからおかしな話である。このごろは毎日テレビで、毒々しいカラーで放映されるペットフード。無農薬・完全栄養とうたっているが、この犬猫の足許にも及ばないひどい粗食で四年あまり、どうやら命をつないで生還してきたわけだ。

ロスキーの主任住宅の使役当番というのがある。二人一組で二軒担当する。まず暖房用の薪づくりであ

る。伐採跡の林に出かけて、直径二十センチ前後のを七、八本伐り倒し、これを運んで薪づくりをする。これを一軒ごとに公平に積み上げるのが仕事である。北海道のヤポンスキーのように、一年分の薪を家のまわりに垣根のように積み上げておくということはない。なぜなら、薪泥棒が夜のうちに盗んでいくからである。だから毎日毎日、使役当番が出て、薪づくりをせねばならぬのだ。

薪仕事が終わると、主任の奥さんが「一休みして」と言っ、パンの切れはしをくれることがある。ちょうど腹ペコになっているから、とても嬉しかった。一休みしてから住宅のまわりの掃除である。こういうときに、棄ててある鶏の骨とか、イモの屑皮など拾ってトラックへ持ち帰る。鶏の骨は夜に皆が寝静まってからストープの火で焼いて食べるのだ。イモの屑皮はスープに入れて、少々えがらいが、我慢の子で食べられる。こうしたおかげで夜も満足して眠りにつくことができた。こういう心理状態は、実際に落ち込んでみると判らない。人間の生き延びたいという執念から

る、ドン底状態に置かれた者の心理は哀れであるが、落ちてみないと判ってもらえない。

コルホーズ（協同農場）についてちょっと触れてみたい。イモ畑などは、大勢の人が出て掘るのだが、夜中から朝にかけて雨など降ると、雨が上がるまで何日もほったらかしになることがある。イモは陽に当たってえがらっぽくなる。従って食用にはイモ皮を厚くむかねばならぬ。ずいぶん不経済な話である。イモの立場で仕事をしないからこんなことになると思った。計画経済とは、労働力を計画的に働かせればうまくいくと考えているようだが、農業はそんなことでうまくいくわけがない。

#### 特別休日についての一コマ

休日（正月元旦、お盆、メーデー、革命記念日など）には、炊事班長が配慮して、コーリヤン、米などを使って「おはぎ」作りをすることがあることは先に書いた。同、祖国に帰ったような気分になって、大喜びである。ところがロスキーの考え方は違う。ロスキーの主任は「規定の食物以外に嗜好物をつくるとは

何事だ」というのである。食べ物は平均して食べるのが労働のためによいので、お前たちが一度に沢山食べようとするのはけしからんと叱られ、論争になったことがあることを記しておく。

私が炊事勤務のとき知った内緒の話を書いておく。ロスキーは、日本人の食生活にとつてなくてはならない味噌、納豆は絶対に食べない。鼻のところに持って行って臭いをかき「ブラサイ（捨てる）」「ニホヤ（だめだ）」と言って顔をしかめるのだ。これはおかしかった。

炊事勤務のとき、毎度のことだが、コゲ飯が出るご飯盒にとつておいて、腹ペコのときに同僚たちに分配する。これには喜んでもらった。黒パンのちびけたものしか配給のない者にとつて、お互いありがたいことだった。

炊事勤務六カ月たち、体位検査合格。いきなり十人ぐらいで、ロスキー主任を先頭に立てて使役に出かけたことがある。途中、オロチ族という少数民族の集落を通り過ぎたことがある。二人の娘さんに出会った。

「ヤボンスキー・ダモイ、一緒に日本に行かないか」と、言葉が十分でないながら、手真似で話しかけてみた。服装も鮭の皮でつくった靴をはいていて、立派な身なりである。この鮭の皮の靴でも、寒いところだから、四、五月ごろまではけるらしい。それにしても美しい模様の入った鮭皮靴を初めて見て、感動してしまった。

まだ炊事班にいたときのこと

ロスキー主任と我々が雑談の途中でこんな口喧嘩になったことがある。ロスキー曰く、「お前たちのミカド（天皇）はマッカーサーに連れていかれた。お前たちのマダム（妻たち）も、マーリンケ（子供たち）も食糧が欠乏し、みじめな暮らして苦しんでいる。お前たちはハラシヨウラポータ（働きのよい労働者）だから、どうだ、いっそのことロスキーで働かないか」と言い出したのである。

これに対して、「ミカドは絶対に連れていかれていない」と、いる、いないで、とうとう口論になってしまった。ロスキー主任が立ち去ってから、「バカヤロ

ウ、こんな寒いところに住んでいられるか」と言いながら、釜の中のコゲ取りである。

主任と口論してからある晩のこと、妻が子供三人を連れてシベリアに訪ねてきてくれた夢を見たことがある。「お前たち、よく来てくれたな」と言って、釜の玄米雑炊を腹いっぱい食べさせた夢である。「お前、ゆんべ、しきりと寝言を言っていたぞ」と、隣に寝ていた友達に教えられた。昨夜は遅番で疲れていたから、ついつい寝言になったのだろうと笑われた。

私たちは、一日も早い帰還を一心に念じていた。また祖国では、つらい暮らしを余儀なくされながらも、がんばってくれている留守家族たち。妻は幼い子供三人を抱えて、教育しながら留守を守り、親類、部落の人たちに助けられて、気候に恵まれてか、米百俵以上を供出、女手一筋でよく頑張ったとあって、村から表彰を受けたということを後に帰国してから聞いたが、その祝いごとがシベリアまで通じて私の夢になったのではないかと、後から妻に語ったことがある。

悪条件の中で明るい話題は、捕虜通信のハガキを故

郷に出せるようになったことだ。喜んで六、七枚、達者で暮らしていることだけを書いて出しておいた。しかし、後になって判ったことだが、一枚も届いていなかったのである。ロスキーのずるいやり方で、ヤポンスキーに安心感を与えておいて、だましてこき使うやり方だったのである。

時は流れ、素敵な出会いがあった。シベリアに入国してから一年半ぐらいたった時のことである。線路を歩いてくる三人のヤポンスキーに出会った。よく見ると、わが村出身の熊木忠男さんである。同じ西能登路部隊の先輩である。こういう出会いをすとは思ひもかけなかった。話を聞くと、ダメイの指示が出て、収容所に向かっているとこだという。初めは冗談だと思ったが、本当の話であった。私は熊木さんに、澤田は元気だったと、是非私の留守家族に伝えてもらいたいと頼んだ。

復員してみると、捕虜通信のハガキは一枚も届いていなかった。幸い熊木さんが復員されると、直ちに私の留守家族に、私の健在を伝えておいてくれた。

それにもこういう裏話がある。熊木さんが私の留守宅を訪ねてみると、家内と子供二人（小学校の三、四年生）が、田んぼで除草機を押していたそうである。それを見たら可愛想になって、その場に行きかねてしまい、私の本家の兄貴に頼んで伝えてもらったそうである。私はそれから二年半後に復員して、初めてこの話を聞かされたのである。

子供たちもよく頑張ってくれたと、今でも感謝している。

あるとき、糧秣とか岩塩がバラ積みされた貨車が入ってくるので、荷降ろし作業の使役ということで無人駅に出かけたことがある。

出かけてみると、何時間も待たされて、肝心の貨車が入ってこない。とうとう夜に入る。夜更けの寒さがひしひしと身体にしみてくる。

こうなると、火の気がほしいのだが、誰もマッチ（スベチカ）を持っていない。仕方がないから、着ている綿入れ服から綿を抜き出し、これを火口にし、例

の神代以来の火起こし術で、木と木を擦り合わせて火をおこすわけだ。あたりから枯れ草、枯れ木などを集めてきて、火に勢いがついてくると本格的な焚き火になる。身体が暖まってくると、うとうとと睡魔が襲ってくる。火の粉が外套に飛び散り、無数の焼け穴をつくって大慌てをする珍事が起こる。ニエ・ハラシヨウだが仕方がない。

誰も時計を持っていないから、今、何時なのかまったく判らない。北斗七星や星の位置で時間を計るぐらいなものである。

一人として時計を持たないのは理由がある。時計は入ソのとき真っ先にロシア兵に強奪されたからである。

ヤポンスキーの所外作業には、必ず監視兵（コンボーイ）がついて歩く。これがまったく程度が低く、たちが悪い。まずまともなコンボーイに出会ったためしがない。

収容所を出発するとき、まず人数の確認をする。これが大変である。アディーン、ドバーと数を数えてい

くが、数えているうちに自分でわからなくなる。また数える。数字にはまったく弱いから、極寒の朝の寒さの中で、ふるえて立っていなければならぬ。足の下から寒さが上がってきて、皆、泣かされたものだ。

彼らの持っているのは携帯小銃（弾倉が丸く円盤状をしたもので、我々はマンドリンと言った。何十発という銃弾が入っていて、自動的にまるで機関銃のように連続発射できる。白兵戦では腰だめで撃つ）である。ヤポンスキーについて歩き監視しながら、興味が出ると空を飛んでいる鳥を目がけて射ってみたり、そこの切株目がけて撃って平気である。危なくて見ておれない気持ちになり、ヤポンスキーの誰しもが、まず度胆を抜かれる。ヤポンスキーには考えられない行動である。

日本の歩兵銃はどうだ。三八式といって、明治三十八年の日露戦争のときの制式銃である。以来、大東亜戦争中まで使用し、一発ずつ弾倉から送り込む方式で、しかも弾倉にはたった五発しか入らないシロモノで、薬莖は回収しろということだ。たった一つ紛失し

ても営倉モノで、こういう教育しか受けてないから、目をむくのは当たり前である。

監視兵の虫のいどころが悪いと、何をされるか判らぬという怖さがある。この監視兵が、一人ずつ我々を呼び出して服装検査をする。何をするかというと、真っ先に強奪するのが時計と万年筆である。まるでそれが特権であるかのようにやられる。悪質な監視兵は、奪った時計を五つも六つも腕に巻きつけて、得意満面としているから手のつけようがない。ロシア人の顔を見れば、今も忘れられないのはこのことである。

さて、東の空がうっすらと白み、明るくなってきた頃になって、やっと貨車が入ってきた。コーリヤンのバラ積み車であった。荷降ろし作業が終わる頃には、ズボンの裾をヒモで嚴重に縛り、これを袋がわりに、ズボンの内側にコーリヤンをダワイするのである。何日か後、またコーリヤンの積み降ろし作業があった。今度は先に味をしめているので、ついつい欲が出て度胸よくダワイするものだから、まるで力士のような格好になる。歩き方がおかしいと、主任につかまった。

「ヤボンスキー、クーシヤチ、マリンケ」と手を合わせたら、幸い勘弁してくれて大助かりであった。

数日後、命ぜられた作業がまだ終わりもしないのに、突然、作業中止の指示が下された。収容所に戻った途端に、装具をまとめて全員集合だというのである。

一時間もたたないうちに貨車が入ってきて、全員乗車の命令である。貨車の中央には石炭ストーブが置いてあり、燃料は石炭である。さてはダモイだぞと、内心の喜びは隠せず、監視兵に聞くと、「ヤボンスキー、ダモイ、トウキョウ」を連発する。外は見えないから暗闇である。

途中の駅で何回か長い長い停車があって、下車してみると、そこはコムソモリスクという街であった。しかも、よく見ると、いつの間にか相当の人数にふくれ上がっていて、途中から貨車を増結してきたものらしい。

汽車の疲れをとるところではない。翌朝からまたも、ノルマ、ノルマの鬼に追われる生活が始まった。

作業は煉瓦工場、伐採作業に分かれたのであるが、少し長くなると交代する。

煉瓦工場の作業は、焼き上がった煉瓦を外に運び出すのが仕事である。慣れないこともあって、ノルマがさっぱり上がらない。煉瓦が焼き上がるまで、暇ができると伐採にかり出される。伐採では、伐り出した木材をトラックの入るところまで運び出し、集積するのが仕事であった。

ようやくカンチャイ（終了）したかと思うと、追われる逃亡者のように、くたくたになって収容所に帰り着く。寝台に横たわると、あらゆる妄想が、回り燈籠のように浮かんでくる。ああアンパンが食べたい。大福餅が食べたい。味噌汁が飲みたい。晩飯といえは黒パンの小さなかけらと、少量のスープだ。満腹感には全然程遠い。グウグウ鳴る腹を押さえながら雑談しているうちに消灯である。

来る日も来る日も着の身着のまま、汚れた服、破れズボンで、寝ても覚めても同じである。

作業に出るときは、缶詰の空き缶を腰に下げて、油

汚れたコザック帽（ロスキーの防寒帽）で伸ばし放題のヒゲ面の顔を覆い、無気力に伐採地に向かうありさまは、自ら哀れと思う以外に言葉はない。

家郷の子供たちにこの姿を見せたら、私の醜い格好に、はたして「お父さんだ」と言って寄り添ってくれるだろうか。情けない念にふけるだけであった。

やがてコムソモリスクにも春が来た。昭和二十三年五月一日、抑留生活四年目、この国のメーデーの日である。メーデーは、十一月七日の革命記念日とともに労働祝祭日である。この日だけはヤボンスキーにも作業はない。ソ連市民同様の休日であった。午後からは、用意されていた収容所内での演芸会の予定である。

炊事班では、三カ月前から糧秣の一定量をほまちして、パン粉、砂糖、食用油などを貯えて、豪華メニューが用意されていた。

戦友たちと昼の食事をとりながら、演芸会の催しを心待ちしているときだった。バラックの入口のドアが突然開いてロスキー主任が入ってきた。「お前ら、ト

ウキョウ・ダモイだ」と、大きな弾んだ声で叫ぶのであった。主任は書類を手にして、ダモイ該当者の氏名を読み上げ出したのである。

これは今までにないことで、どうも本当らしいというところで、一同総立ちして、拍手の連発で騒然となり、演芸会は一遍に飛んでしまった。

メーデーのご馳走も、のどには入れたはずなのに、食べたのか食べないのか、わからない始末である。

ダモイとなったら、栄養失調だ、神経痛だなどと泣きごと言っておれるものか。恨みつらみも上の空である。とにかく日本の土をこの足で踏みつけて立つ。それまで何としても生き残ってみせるぞという思いがグツグツと心の底から湧いてくるのである。

夕方五時までに装具を整理しダモイ列車に乗車の準備を整える、という指示である。一同は、足が地についているのか、すっかり上がってしまい、冷静に、冷静にと思いつながらも、装具をまとめるのが大変である。

乞食の服装に、交換もクソもないのだが、ダモイと

なったら、お互い融通し合い、少しでもましな服装を調えようとやっていることが、滑稽なやりとりだった。

履物といえば木靴である。日本で言えば木のサンダルを靴底の代わりにして、上の方はズックでできた編み上げである。歩けばガタンガタンと音のする奴である。足には靴下がわりに布を巻きつけて、編み上げのようにヒモ結びだから足首が締めつけられ、歩くだけでも大変である。準備ができた仲間たちと誘い合って、郊外に葬られている戦友たちの埋葬地に、最後の別れのお参りに出かけた。

不幸にも祖国の土を踏むことなく、恋しい肉親たちとも相まみえることなく、異国の地に眠る戦友たちの無念さを思うとき、ただただ悲哀の念を深くするばかりであって、冥福を祈ったのである。

さて、いよいよ乗車間際になって、入ソ以来の労働報酬ということで、ロスキー紙幣のルーブルが五、六十ルーブル渡された。これは後に出国のとき、使い残しのルーブルは国外持ち出しまかりならぬということ

で全部没収されてしまったから、まったくの気休めの  
ダマシであることが後で判った。

列車は板張りの二段装置の貨車である。乗車完了で  
列車は走り出した。大きな駅に停まると、じっと停  
まって動かない。しかも二段装置はいいとして、にわ  
か造作のため、列車の揺れが激しいと上段の板が衝撃  
で外れて落ちる。下にいる者はたまったものではな  
い。床板の落下が二度もあって、ひどい目に遭った  
が、幸い大きな怪我騒ぎにはならなかった。

途中の駅で停車の長いとき、ロスキーの監視員に  
ループルを渡して買物を頼むと、買物をしてくれる便  
宜をはかってくれた。しかし、二千人に近い大勢の人  
間を相手にしての買物は、ほんの一部の人にしか当た  
らない始末であった。

コムソモリスクを出発してから南下を続けて、よう  
やくシベリア本線に出る。ハバロフスク、ウオロシロ  
フを通過して、再び枝線に入る。東に走ってスーチャ  
ンに着いた。ここからスーチャン川に沿って南下、河  
口の街ナホトカである。実にここまで二十二日間か

かって、日本海に臨んだ海浜に降ろされた。

ナホトカ収容所の収容能力が一万五千人余りなの  
に、ソ連側が季節のよい六月から八月にかけて大量の  
抑留者を送り込んだから、船には乗りきれず、収容施  
設からあふれ出し、せっかくの帰還者を逆送させ、再  
度、奥地に送り込むという事態が起こっていた。

もう少しでシベリアの地を離れて、夢にまで見続け  
てきた祖国の土を踏む一歩手前まで来て死んでいった  
仲間たちのことを思うと、本当に哀れである。

幸い下車後、直ちに装具検査、なかなか今までにな  
い厳しさである。せっかくコムソモリスクでもらった  
ループル紙幣は全部没収である。仲間たちの住所、氏  
名など書いたメモ類など、一切没収である。

ここで、浦口忠吉君、松屋栄松君という、家郷前田  
村の旧知の人々に出会うことができたときは本当に嬉  
しかった。お互いに、無事に生き残ったことを喜び合  
い、故国に戻ったら、早い者から家族に知らせる約束  
をし合ったのである。

私が乗せられた引揚船は高砂丸であった。ナホトカ

の港は、まだ岸壁も棧橋もない港であった。小船で何回かに分かれて本船まで運ぶのであった。ナホトカで新しく編成された梯団として、混成の二千人が乗船した。

シベリア抑留者を最後まで苦しめたのは、もちろん強制労働と、日夜を分かたぬ飢餓であった。しかし、民主化運動という名の赤化教育も、これまた抑留者を精神的に痛め尽くした。この教化活動は、同じ日本人同士が相反目するという不幸を生んだのである。ナホトカを離れるまで民主化のリーダーとして権力の側にいた者たちが、乗船して、船がいよいよ日本海の中ごろにさしかかると、それまでいじめられていた大衆から袋叩きに遭ったという噂も何回となく耳にしている。私は年齢の違いもあり、年寄りとしてあまり関心も持たず、積極的に動いたことはなかった。

いよいよ船は舞鶴入港である。船長より挨拶がある。「乗船の皆様、長い間、酷寒の地で、重労働と飢餓によく耐えられご帰還、ご苦労さまでした。めでたく祖国舞鶴の港に入港いたしました。下船の際は、棧

橋が揺れますので、岸壁に着くまでは二人ずつ必ず手をつないでお進み願います」と言うのであった。

五月二十五日、舞鶴棧橋に接岸。岸壁には多くの人が出迎えていて、歓迎の手を振っている。一步、一步、確かめるように足を踏み出して上陸したときの感激は、今も忘れることができない。

ところが突然、人波をかき分けて大きな旗を掲げた年配の女性が「兵隊さん、女性にも選挙権が与えられました。どうぞよろしく」と、隊列に向かって飛び出してきた。これには驚くとともに、この女は何を考えているのか。今、ようやくシベリア地獄から抜け出てきて故国の土を踏もうとする人間に向かって、何を言うのか。祖国に上陸早々、いやな思いにさせられたことは、今もって忘れることはできない。

迎えの人ごみの中で子供の手を引いたお母さんから「うちの人を知りませんか？ 元気でしょうか？」と声をかけられたが、部隊名も、武装解除を受けたところも判らぬという。私はただ、「一万人近い沢山の人がナホトカまで来ていて、船を待っている。政府にど

んどん船を回すように言って下さい」と答えるより仕方なかった。

援護局の建物に入って、まず検疫である。DDTを頭から足の先まで、真っ白になるまで振りかけられた。これが終わると事情聴取である。沢山の人を扱ってきているのか、なかなかのベテランで、ヤマをかけた質問してくる。「赤化運動をやっていたかどうか。リーダーの名前を教えてください」となどと質問される。この事情聴取が終わると、「ご苦勞様でした」と金十五円が支給された。この十五円で果たして故郷の北海道まで帰ることができのかどうか、不安になった。

満四年ぶりで日本式の大浴場に入る。ゆっくりと、なんの恐れもなく手足を伸ばして入る。誰しもが、シベリア地獄をのがれて、ようやく祖国に帰ってきたのだという思いに感慨深くふけるのであった。

理髪に出かけ、散髪も終わり、さっぱりする。シベリアから着てきた、小汚い、汚れきった典型的なシューバもコザック帽もあまりに惨めで、焼き捨てた

い気持ちにかられる。

食堂に入って夕食が出る。上陸して初めての純和食である。小さなカケラの黒パン、具があるかないかの哀れなスープの昨日までの食事とは大違いである。

九州から北海道までの同僚たちの四方山話はにぎやかで、なかなか話は尽きない。明日はそれぞれ別れとなり、家族のひたすら待ち続ける故郷に向かって帰って行くのだ。

シベリア抑留六十万の同胞が、捕虜という屈辱を背負いながら、熾烈な環境と過酷な労働に耐えて、ひたすら生への執念に燃えて生き抜いてきた。その生活の一端を体験記として記した。

終わりに、不幸にも祖国の土を踏むことなく、恋しい肉親ともまみえることなく、かの凍土の下に眠る六万の同胞の無念さに思いを馳せる。

#### 【執筆者の紹介】

昭和十九年四月 召集 宗谷要塞銃砲兵連隊（稚内

市)

九月 第二中隊に配属(樺太島西能登路

岬)

昭和二十年八月三十日 ソ連海軍上陸して武装解除、

抑留生活始まる。

十月二十三日 ハバロフスク州ポートワニ

(現ワニノ市)上陸。ホ

トー収容所に入る。

昭和二十三年五月二十五日 高砂丸にて舞鶴港上陸、

同二十八日復員。

(北海道 木呂子 敏彦)

## シベリア収容所回顧

岩手県 立石 章

ジマ到着の夜

(イルクーツク北方二五〇キロメートル)

「シベリア」は象徴的な呼び名であり「悲しい場

所」の代名詞でもある。その大陸を列車はもう何日走り続けたのだろう。もうどうすることも出来ない流れの中に身を託し、雲煙万里の北の果て、見渡すかぎり茫漠とした無味乾燥の白い山野を、あてもなく彷徨するかのように雪のちらつく、バイカル湖畔を右に左にくねりながら走り続けた。暗澹とした疑心暗鬼の憂いに閉ざされた毎日だったが、今晚とうとう俘虜生活を余儀なくされた運命の地「ジマ駅」に到着したのだった。

到着は深夜のこととて貨車内は物音ひとつせず皆寝静まっていた。やがて列車は再びゆっくりと動き出すと、線路が急カーブしているのであるう、レールと車輪の擦り合う音が「ギーギー」と鳴りだした。その異様な音に目覚めた者もいたようだが、だれ一人、声として発する者もなく、唯々無言で不安におののきなながら、これからの運命を暗示するかのようなその不気味な音を聞いていた。どうやらジマ駅から街中に通ずる終着地である引込線に入ったようである。

ソ満国境の街ブラゴエシチェンスク乗車当初はウラ